



幸せな贈り物

## 一文無しになる苦痛「賭博中毒」

賭博中毒、ゲーム中毒、ショッピング中毒、この三つは、最近になって増えた一種の現代病です。一度、賭博にはまれば、子どもも、仕事も思い出さなくなって、自分を台無しにすることを分かっているのに、抜け出すことができないのが賭博中毒だと言われています。京畿道の議

政府に住むキム(42)さんは、有名な自動車会社の整備技師でした。今年のはじめから競馬とインターネット賭博などに手を出して、4億ウォン相当の借金をするようになりました。先月の2日、借金の催促に苦しんだ金さんは、結局、自殺を決心して、残される家族が心配だと家の奥座敷で奥さん(39)を電気コードで首を締めて殺し、二日後には小さな部屋で眠っていた息子(14)も鈍器で頭を殴って殺害しました。4月イ(48)さんは、賭博で財産を使い果たして悲観して、ソウルのクロ区の自分のアパート18階から飛びおりて自ら命を断ちました。

最近、賭博中毒による社会的問題が続いている中に、放送関係のシン・チョンファンがフィリピンに遠征して賭博をした事件で芸能界が騒がしくなっていました。シンさんは、2005年11月に賭博の疑いで起訴されて、しばらく放送に出演できずにいて、今年7月には、江原チョンソン江原ランドで1億8000万ウォンを借りたあと、返さない疑いで起訴されたりしました。シンさんが賭博で問題を起こしたのは、これで三回目です。シン・チョンファン以外にも、これまでコメディアンファン・キソンを含め、キム・チュンホ、歌手のシン・ヘソン、ルーラ出身のイ・サンミンなどが賭博で名誉を失墜したり



大当たりを追って落ちぶれる

# 賭博中毒

しました。賭博中毒は、自分の意志で賭博を調節することができる力を失うようになって、個人と社会の道徳性を破壊する状態を言います。うつ病と不安症があとにしたがうことはもちろんで、家庭崩壊と各種の犯罪にまでつながって、複合的な問題を生んでいます。

先月10日、韓国国務総理室所属のNGCC(The National Gaming Control Commission)によれば、2008年末現在、韓国内19歳以上大人の9.5%である359万人が賭博中毒症状を見せているのに、この数値は先進国平均の賭博中毒率4%の2倍を越えて1.9%のイギリスと比べると5倍近く高いと明らかになりました。保護治療が至急な「病的中毒」の有病率は2.3%である81万人水準で、30~40代の男性自営業者たちが賭博中毒者の大部分を占めて景気不況が持続している中、このような傾向がより強くなると憂慮しました。一方、賭博産業の売上は2000年6兆6977億ウォン、2006年12兆1321億ウォン、2007年14兆5928億ウォン、2008年には16兆40億ウォンを記録し、去年の総売上額は16兆5千億ウォンで、純売上高は6兆8千億ウォンだったと明らかにしました。一言で賭博は病気です。

**賭博の元祖を知っていますか** それなら、このような賭博の歴史はいつから始まったのでしょうか。その話が、聖書の創世記3章に出ています。人間最大の賭博事件はこのように始まりました。万物を創造して最後にエデンの園を準備された神様は、アダムとエバを創造して、そこで神様がくださった祝福を味わいながら生きるようにされました。その時、すでに天から追い出されていた墮落した天使サタンが、エバに近づいて来て誘惑しました。サタンは、目に見えない霊的存在で、手段と方法を選ばずに人間を滅亡させようと考えています。シャーマンに会って話してみれば、彼らが仕えている悪霊が、彼らの生活と家庭をどれほど破壊しているのか簡単に分かります。もしサタンが目に見えるように現われて「エバよ、私は神様に敵対して、天から追い出されたサタンだから、お前は私の話を聞かなければならない！」と言ったら、エバがだまされなかったでしょうが、サタンは園の動物の中で一番こうかつであった蛇に入って行って、アダムとエバを絶妙に誘惑しました。どのように誘惑したのでしょうか。サタンはいくつかの戦略を使いました。先にエバが神様を疑って、自我に酔うように餌を投げて、意図的な質問をしました。「神様が善悪の知識の木から取って食べるなど言われたのか」と問わずに、「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか」(創世記3:1)と問いました。エバにとって神様を疑って、敵対するように投げた誘導する質問でした。このだましごとにだまされたエバが答えて、「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけなからだ』と仰せになりました。」(創世記3:2~3)と言いました。神様は「それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ」(創世記2:17)とおっしゃったのですが、エバの心に疑いが芽生えたのでした。エバの心が揺れていることに気づいたサタンは、最大の賭博を行いました。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」(創世記3:4~5) その言葉を聞いたエバが「そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた」(創世記

3:6) このようにサタンが投げた快樂の種は、人間の生活の中に入りはじめ、サタンにだまされたエバは、もっと刺激的な肉的な情欲と目の欲を捜して神様に不従順になって離れるようになりました。中毒はすべて人間の快樂と連関があると言われます。快樂を担当する脳は、特定の刺激が入って来れば快樂物質を多量分泌するのですが、それ以後、本能的にもっと強い刺激を探して出るようになって、この時、衝動を調節する神経伝達物質の均衡が崩れれば直ちに中毒にはまると言われています。最初の人間であるアダムとエバは、人間の快樂を利用したサタンの最大の賭博に引かかってしまったのです。その後で人間にやって来た運命と生年月日による運の鎖、そして、その後に隠されたどうしようもない霊的な問題と暗やみの勢力(サタン)の働き。生きて行くほど訪れる名前も分からないむなしさと不安、科学的に理性的に理解することができない愚かな偶像崇拜の繰り返し、快樂を追いかけながらも、私一人で苦しむ精神的苦痛、近づく肉体の病氣、自殺の誘惑と来世の刑罰、再び繰り返されるしかない未来の苦痛と家系の霊的子孫への遺産。

**このように終わらせることができます** 水を離れた魚が水ではない他のどれでも満足することができないように、神様を離れた人間は、神様との出会い以外に、他のどれでも幸せではありません。それで、神様に会う瞬間、人生のむなしさとすべての問題は解決されます。その道を神様が自ら開いてくださいました。聖書の約束どおり、キリストを送ってください。人間の罪を負って十字架で死んで復活することでサタンの權威を打ち破り、すべての罪と呪いを解決して、神様に会う道を開いてくださいました(ヨハネの手紙第一 3:8、マルコの福音書 10:45、ヨハネの福音書 14:6)。この方がすなわちキリストであるイエス様です。ですから、だれでもキリストとして来られたイエス様を信じて受け入れれば、すぐに神様の子どもになります。この時、はじめて人間には聖書に約束されたすべての神様の祝福と本当の幸せと真の満足が自分のものになるのです。「主イエス様を信じれば救われます。あなたは真の幸せを味わう大事な人です」

「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」  
(ヨハネの福音書 10:10)



# 十字架の贖いの恵み

**王様とお母さん** すべての民が大きい困難もなく、熱心に働いて幸せに暮らす小さな国がありました。ところが、ある日からだれから始まったか分からない賭博が民の間に広がって行き始めました。とうとう、多くの民が家々にあちこちで集まって、賭博をするために働きに出ることさえしない事態にまで至ってしまいました。この事実を知った王様は、賭博の根を絶つために、極端な措置を発表するようになりました。今からだれであっても、ひそかに賭博をして見つければ、すべての民が見る前で石で打ち殺すというものでした。その時から、国の中には賭博の問題が消え始め、民は以前のように、野に出て熱心に仕事をするようになりました。賭博が消えたようなので、王様も胸をなでおろすようになったその時に、ひそかに賭博する人々がいるという情報が入って来ました。あえて命令を破って賭博する者がいるという事実を知った王様は、すぐその人々を捕まえて来るようにして、すべての民を呼び集めました。しかし、捕まえて来た三人の人の中には、驚くべきことに王様のお母さんがいました。自分のお母さんを確認した王様は、瞬間、目の前が真っ暗になるように感じました。すべての民が見守る中で、長い沈黙が流れ、王様は深い苦悩に陥りました。罪人として自分と民の前に立っている老母を見て、心が耐えられないほど苦しかったのですが、いよいよ決断を下して、民に今すぐ石を持って罪人たちに投げなさいと命令を下しました。ためらった民は王様の強い命令の前に一つ二つ石を投げ始め、一斉に石を投げる、その時に王は止める間もなく、罪人たちに向けて跳びこんで、彼のお母さんを抱えながら離さなかったのです。民が投げたその多くの石をお母さんの代わりに王様が打たれたのでした。あつという間に起った事だったので、血を流しながら死んで行く王様を見るお母さんと民は、一緒に大声で泣いたということです。そして、その後にはその国には賭博の問題が消えるようになったし、自分のお母さんを救う代わりに死んだ王様は、すべての民の尊敬と愛の対象になったということです。王様は自分が下した命令を民の前で守ったと同時に、愛するお母さんも救って、賭博という国家的な危機も完全に解決したのです。

## 贖いの恵み

神様との約束を破って神様を離れて、罪の中に陥って死ぬしかなかった私たちのために、神様はご自分の息子であるイエス様を十字架で私たちの代わりに死ぬようにされたことで、私たちの罪の問題を完全に解決して下さり、回復の道を開いてくださって、罪を犯すようにしたサタンの権威を永遠に滅ぼされたのです。これがイエス様を通しての罪の赦しの意味で、贖いの恵みです。イエス・キリストが十字架で流した贖いの血は、どんな罪悪も雪のように覆って、罪はないと赦して下さり、罪の問題を解決します。これが人間に向けた神様の愛です。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ 5:8)

## 神様の子どもになる 受け入れの祈り

愛の父なる神様、私は罪人です。今まで神様を離れ、サタンの支配の下に縛られて、奴隷のように生きて来ました。

しかし、今、この時間、イエス様を私の救い主、私の神様、私のキリストとして受け入れれます。

イエス・キリストは、神様に会う唯一の道であり、サタンの権威を打ち砕かれ、すべての罪とのろいと災いから私を解放してください。キリストであると信じます。

いま、私の中に入って来てくださり、私の主人になってください。

今から私の生涯を細かく導いてください。

イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

## 神様の子ども 毎日の祈り

父なる神様、イエス・キリストによって神様がいつも私とともにおられて、導かれることを感謝します。

今日も、すべての生活の中で、神様の子どもになった祝福を味わうように、聖霊で満たしてください。

私の家庭と現場と行くところごとに福音を邪魔して困らせるすべてのサタンの勢力を権威あるイエス・キリストの御名で縛ってください。

どんなこと、どんな問題でも、解決者であるイエス・キリストに任せて、その中で神様のより良い計画を発見しながら、聖霊に導かれる生活になりますように。

そして、私の生活を通してイエス様がキリストであるということがあかしされ、私の現場に神の国が臨むようにしてください。毎日、私の生活の中で神様の願いである世界福音化の契約を握って勝利できますように。

今も私とともにおられるイエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

## ふらりと、どこかに行ってしまいたいあなたへ

その冬が行って春が来て、また春が行き、その夏の日が来て、もっと歳月がたつしかし、私は知っています。あなたがまた帰って来るはずだということをして、私が約束した時のように、待っている私を見つけるんです。そうです。私が約束した時のように待っている私を見つけるんです。待っている私を



この歌は学生時代にたくさん歌ったサルベージの歌(Solveig Song)で、ノルウェーの作曲家グリーグの組曲の中の一つであるが、内容は、ある山間の村に貧しい農夫ペール・ギュントが暮らしていて、その町に美しい少女サルベージがいたが二人は愛していて、結婚を約束した。しかし、夢想家で放浪していたお父さんのように、ペール・ギュントはお金をもうけるために外国にふらりと立ち去って、いろいろな苦勞をしたあげく、お金を蓄えて故国に帰って来る途中、国境で山賊にお金をすべて奪われる。やっと故郷に帰って来るが、お母さんはもう死んでいたし、お母さんが住んでいた小屋に到着して、門を開いたらお母さんの代わりに愛する恋人サルベージが白髪になってすべて老けてしまった年寄りペール・ギュントに会う。病んで疲れてしまったペール・ギュントは、サルベージの膝に頭を置いて死ぬ。この時、去っていた者を迎えるサルベージの悲しい歌だ。

旅行の自由を持った国だけが本当の自由国家だと言うが、私たちにも旅行の自由化はそんなに長年の歴史はない。自由奔放さが若者達の特権だが、それは流れ者とは別だ。人間に家は地域を離れないという覚悟を現わす象徴的な建物だ。家を持った人は、その地域環境から簡単に脱することはない。一瞬の旅行は可能でも、その人の方向はいつも家に帰って来る。それで、遊牧民たちは先に家を動きやすい形態に作って、自分の現場を流動的にさせる。規格化された都会人たちは、いつでも心が向けば離れることができる条件を取り揃えた彼らの生活をうらやましく思うかもしれない。

人間にはだれも自分を待っていてくれないということが分かっている、どこかに行けばできるという欲求がある。人間にあるこのような放浪の欲求は私が作ったとか、学習したからではなく本能的なのだ。神様を離れた最初の瞬間、元々人間に与えられた幸せを逃してエデンから追い出された時から、人

間のさまよいは始まった。どこかにあると思われるそのおぼろげな幸せの蜃気楼に従って、人々はさまざまな理由をつけて道に出る。心がゆううつで息苦しいこともあって、新しいことへのあこがれに導かれて、人間は一応、家を出ることを願う。台所を離れた女の人々の心のように、もしかして、あなたもこの時にあれこれ思わずに、ふらりとどこかに行ってしまうたくないだろうか。しかし、結局、人は人間が出発したその場に帰って来るようになっている。一例で、家がないホームレスだと言っても、結局、その人の半径は、彼がとどまる周辺に過ぎないだろう。全国を一周するホームレスや世界を遊覧するホームレスはいないのだ。

結局、どこかに行ってしまいたい心は理解できるが、人間の根本を正しくとらえることができこそ、離れないようになって自由を得るようになる。聖書は、真理が自由を与えると言うが、真理はすなわちイエスを言う。人間は家にも、外に歩き回っていても、いつも幸せな存在なのに、家で得ることができなかったその何かが、この世界のどこかにはずだという錯覚が人間をさまよいの道に出るようさせるのだ。出たければ出てみなさい。しかし、人生は出ても入って来ても、人生の根本問題を福音でいやされると、どこでも真の幸せを味わうようになる。

チョン・ヒョングク牧師(福音コラムニスト)

\*相談したい方はこちらまでどうぞ